

現代朝鮮語の与格形式-eykey の示す「場所性」について

—移動動詞結合と存在詞結合を中心に—

山崎玲美奈

rem79rem@yahoo.co.jp

キーワード： 与格 場所性 移動動詞 存在詞 所有 所在 具体名詞 抽象名詞

要旨

現代朝鮮語の与格形式である-eykey は有情名詞とのみ結びつくもので、日本語に訳す際には「に」格を用いて訳すことが多い。その一方で、この-eykey は移動動詞及び存在詞と結びつく際には「～のところ」を補う必要のある「場所性」を示す場合が存在する。本稿では、このような-eykey が「場所性」を示す場合と示さない場合の条件がいかなるものであるのかを、移動動詞結合と存在詞結合という場合を中心として明らかにすることを試みた。

その結果、第一に、【eykey 名詞句+移動動詞】という結合では、移動する主体が具体名詞で人間などの有情物であり、結びつく移動動詞が kata (行く) や ota (来る) といった典型的な移動動詞の場合は「場所性」を明確に示した。その一方で移動する主体が抽象名詞である場合や、移動動詞が takakata (近づいていく) のように複合的な要素を持つ非典型的な移動動詞である場合には「場所性」を示す意味合いが弱まり、「対象」を表す用法により近づくことが明らかになった。

第二に、【eykey 名詞句+名詞+存在詞】という結合では、存在する主体が抽象名詞である場合には「場所性」を示さない。その一方で、存在する主体が具体名詞である場合には「場所性」を示しうるが、それにはある程度の条件が必要となる。eykey 名詞句が「場所性」を示し「所在」を表すのは、具体名詞が eykey 名詞句と同等程度の大きさで且つ可動性を持つ時のみであり、eykey 名詞句を包摂する大きさであり、可動性を持たない場合には「所有」を表し「場所性」を示さない。このことから、【eykey 名詞句+名詞+存在詞】という結合において eykey 名詞句が「場所性」を示すには、存在する主体となる名詞が具体名詞であり、且つ eykey 名詞句と同程度の大きさで、可動性を持つ物に限られるという制約を持つことが明らかになった。

1. はじめに

1.1 研究の目的

現代朝鮮語の与格形式である-eykey は有情名詞とのみ結びつくもので、日本語に翻訳する際には「に」格を用いて訳すことが多い。その一方で kata (行く) や ota (来る) のような移動動詞及び、存在詞と結びつく際には「～に」ではなく、次の(2)(3)のように「～のところ」を補う必要がある場合が存在する。

(1) chinkwu-eykey phyenci-lul ponay-ssta.¹

友達-に 手紙-を 送っ-た
友達に手紙を送った。

(2) na-eykey w-a pw-a.

私-に 来-て み-て
私のところに来てごらん。

(3) ku selyu-nun ecey-kkaci na-eykey iss-essnunteyyo.

その 書類-は 昨日-まで 私-に あっ-たのですが
その書類は昨日まで私のところにあったんですがね。

このように、日本語では「に」格のみでは対象や着点のみを表し、移動動詞や存在詞と結合して場所を表すことができない。それに対して、朝鮮語の-eykey はそれのみで「に」格の意味を表すことも、移動動詞や存在詞と結合して「～のところに」という場所を表すことも可能である。

本稿では、(2)(3)のように本来は場所性のない有情名詞が eykey 格をとり、eykey 名詞句がその有情名詞そのものを示すだけでなく、日本語で解釈をする際に「～のところに」という位置名詞を挟まなければならない場合を「場所性」があるものと定義する²。そして、このような「場所性」を示す場合の-eykey の意味機能および、「場所性」を示す場合と示さない場合の条件が異なるものであるのか、あるいは「場所性」を示すには制約が存在するのかを、移動動詞結合と存在詞結合という場合を中心として明らかにすることを試みる。

1.2 研究方法及び研究対象

本稿で分析する用例は、主として国立国語研究院(2010)の「21世紀世宗計画均衡コーパス」を用い、用例の検索には「ソッココマ世宗コーパス活用システム」³を用いる。必要に応じてこれ以外の用例に言及することもあるが、出現頻度等は全てこの言語資料に基づいた。基本資料以外の用例を示す場合にはそのつど明示することとし、分析を行う中で必要に応じて作例を用いることがある。

文語資料に現れた-eykey の用例数は、全体で 54,930 例であった。その一方で、口語資料に現れた-eykey の用例数は全体で 423 例であった。ここでは、文語資料の中から無作為に選んだ 3000 例と口語資料に現れた 423 例の計 3423 例を分析の対象として用いる。この現れた用例の中から、

¹ (1)は作例。(2),(3)は油谷幸利他(1993:1276)より引用。

² この定義は分析を進める現段階での暫定的なものであり、今後より客観的な基準を用いて定義したい。

³ <http://kkma.snu.ac.kr/> (検索日 2014年8月1日)

-eykey の文語の用例および口語の用例を抽出し、それらの中から-eykey が移動動詞と結合しているものと、存在詞と結合しているものを取り出した。これらの意味機能を分析し、検証していくことにする。

なお、本稿で対象とする形式は-eykey のみとし、-eykey に更に格助詞が接続した形式および-eykey issese (～にとって) 等の諸形式は対象から除外することとする。

2. 先行研究

-eykey について辞書類では、主な意味機能として「(人や動物を表す名詞に付いて) 行為の影響を受ける対象であることを表す助詞」などのように記述されている。-eykey が「～のところに」という場所を表す用法については、菅野裕臣他(1988;1991)では「+存在を表す一部の用言。場所」, 「+移動動作の動詞。方向」と分類しており、油谷幸利他(1993)では「移動の帰着点」, 「場所を示す」として、独立した用法として取り立てている。

一方、延世大学言語情報開発研究院 (1998)では、cwuta (あげる), kaluchita (教える), mathkita (預ける), kata (行く) 等と共に用いられ[ある状態がおきる固定した位置(所在地)をあらわす言葉について](saicy, aney)「あいだに, 中に」, そして issta (ある, いる), namta (残る) などと共に用いられ[何かを持っている対象をあらわす言葉について](~ka kacin kesulo)「～が持っているものとして」と記述している。これらの辞書類では、-eykey が「～のところに」という場所を表す用法については分類は多少異なるものの用法のひとつとして記述されている。

この他に、辞書類以外の先行研究である生越(2002)では、日本語の二格との対照研究において-eykey が移動動詞と結合する場合について次のように述べている。

日本語の「来る」は二格名詞句に有生名詞をとることができないのに対し、朝鮮語の ota(来る)は二格に当たる eykey 格名詞句に有生名詞をとることが可能なのである。このような日本語と朝鮮語の違いは、動詞が「行く, 来る」[kata(行く), ota(来る)], あるいはそれらを含む複合動詞のときに現れる。朝鮮語で有生名詞が eykey 格をとるとき、その eykey 格名詞句はその人・動物そのものを示すだけでなく、人・動物のいる場所も示すことができるということになる。つまり、朝鮮語では文の構造に合わせて eykey 格名詞句の意味を拡張して解釈することが可能なのである。これに対し、日本語の場合は、有生名詞が二格をとると、その人・動物そのものを示すだけで、いる場所は示さない。そのため、二格が到着場所を示す場合には、場所性が明確になる「ところ」を付け加えなければならないのである。

これ以外にも、日本語の方向表現の目的地が場所性のない「人・物」であるときに位置名詞を挟まなければならないという点に関して、亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996:1301)では次のように述べている。

「日本語の「～へ行く」といった方向表現は、たとえば英語の‘go to the person’などとは対比的に、目的地が「学校、海、公園、(～の家)」などの名詞の場合にはそれに直属するが、トコロ性のない「人、物」を表す名詞の場合には、「先生のところ、ブランコのところ、門の前」のように位置名詞を挟まなければならない。」

このように、日本語の「に」格は場所性を持たないのに対し、朝鮮語の-eykey は場所性をもちうることについては、朴良圭(1972, 1975)で「中世国語の歴史から立証される事実である」とし、-eykey は中世国語の「-oy/uy-key」に遡るものであるため、場所性をもちうるのだとした。伊藤英人(2013:304)においても、朝鮮語の「所有・存在表現」について述べる中で、「トコロ性に関して言うと、「人間名詞+与格+助詞」はそれだけで「だれだれのところに」と言う意味を表す。これは上述のように与格助詞{-eykey, -kkey(尊敬)}が「～のソコへ」という場所名詞を含む「属格+トコロ+処格」の連なりの文文化の結果生じた形式であるためである」とし、朝鮮語の-eykey が場所性を持ちうることについて言及している。

更に、日本語「に」との対照という観点から-eykey について論じた中西(2010)においても、移動動詞が後続する「到達点」及び、存在詞が後続し「所有者」を表す意味機能⁴について言及している。そこで中西(2010)は「eykey は、本来その内部に具体物を包摂するだけの空間を持たない有情物に、他の有情物の到達を許し具体物の所持を可能にするだけのスペースを与える」と述べた。

以上のように、-eykey が「～のところに」という「場所性」を示す用法、先行研究で言うところの「到達点」や「所有者」を表すことは、-eykey にあつて日本語の「に」にはない機能としてこれまでも言及されてきた。しかし、共に用いられる用言への言及はあるが、その用言の範囲や、存在詞との結合における主体となる名詞句への言及はなされていない。そして、-eykey が場所性を持ちうるものがその語源に由来するものであるならば、-eykey が常に場所性を持つのではなく、場所性を持つ用法と持たない用法を共に有しているのは何故なのであろうか。本稿では-eykey の意味機能を、結びつく用言や、存在詞と結合する場合に主体となる名詞の属性等に注目し、いかなる条件下では-eykey が「場所性」を示し、いかなる条件下では「場所性」を示さない、あるいは示すことができないのかという点について考察していきたい。

3. 分析

3.1 移動動詞結合

分析に用いる用例は、先にも述べたとおり文語資料の中から無作為に選んだ 3000 例および口語資料に現れた全 423 例をあわせた、計 3423 例を対象とする。その内、eykey 名詞句と移動

⁴ 中西(2010:29)では、それぞれを「有情物の到達点」、「具体物の所持」としている。

動詞が結びついている例の出現数と、移動する主体の種類の内訳は次の通りだった。⁵

表 1 【移動動詞結合の出現数と移動する主体の種類】

出現数			
64			
移動する主体			
具体名詞		抽象名詞	
43		21	
有情名詞	無情名詞		
38	5		

表 1 から、移動動詞結合の場合には移動する主体に無情名詞を取りにくい傾向が見受けられる。

3.1.1 移動する主体が具体名詞の場合

【eykey 名詞句＋移動動詞】という結合において、移動する主体が具体名詞であった 43 例のうち、有情名詞の例は 38 例、無情名詞の例は 5 例現れた。

用例に現れた移動動詞には、生越(2002)にもあったように動詞が「行く、来る」「kata(行く), ota(来る)」,あるいはそれらを含む複合動詞であった。まずはこの内の、移動動詞に kata(行く), ota(来る) が用いられている例について見ていきたい。出現数の内訳は、次の通りだった。

表 2 【eykey 名詞句＋移動動詞 (kata (行く), ota (来る))】の出現数と移動する主体の種類

kata		ota			
12		5			
移動する主体					
具体名詞		抽象名詞 ⁶	具体名詞		抽象名詞
11		1	5		0
有情名詞	無情名詞		有情名詞	無情名詞	
10	1		4	1	

この例には、次のようなものがあった。

⁵ コーパスには-eykeylo(～に、～のところに)と移動動詞が結合している例も多く見られたが本稿では対象外としているため、出現数には含めない。

⁶ 移動する主体が抽象名詞の場合については、3.1.2 で言及する。

(4) elmaceney apeci-kkeysenun alaysmauley salko kyeysinun wangkomo-eykey kasi-ntamye cacenkelul
父-は 大叔母-に 行く-と言って

telkhengtelkheng manciko kyeysyessta. <出典: 월간 에세이>

少し前に、父は下の村に住んでいる大叔母のところに行くと言って、自転車をガタガタ触っていた。 <出典:月刊エッセイ>

(5) yocumey mak nwukwunka-ka na-eykey wa-kackwu yenyeyin talmasstanun keya.
誰か-が 私-に 来-て

<出典: 일상대화_미팅, 형태소 분석 전자파일>

ここ最近、誰かが私のところに来て芸能人に似ているって言うの。 <出典: 日常会話_形態素分析電子ファイル>

そして、移動する主体が無情名詞である【無情名詞+eykey 名詞句+移動動詞】という 1 例には、次のようなものが現れた。

(6) suphituka cohun pwupheyl-eykey kong-i ka-sseyo.

ブッフエル-に ボール-が 行き-ました

<出典: 방송_스포츠중계(축구), 형태소 분석 전자파일>

スピードの良いブッフエルのところにボールが行きました。 <出典: 放送_スポーツ中継(サッカー)_形態素分析電子ファイル>

この(4)(5)(6)のように、eykey 名詞句と結びつく移動動詞に kata (行く), ota (来る) のような典型的な移動動詞が用いられ、移動する主体が具体名詞である場合には、それが有情物であっても無情物であっても、-eykey が場所性を示すことが確認できる。本来は場所性のない有情名詞が eykey 格をとり、eykey 名詞句がその有情名詞そのものを示すだけでなく、日本語で解釈をする際に「~のところ」という位置名詞を挟まなければならない場所性を持つ例である。

その一方で、(6) のような移動する主体が無情名詞である【無情名詞+eykey 名詞句+移動動詞】という例は、調査段階から出現することを想定していた用法であったが、実際の用例では 3423 例中 1 例という結果となった。この(6)の例が口語に現れたことから、このような【無情名詞+eykey 名詞句+移動動詞】という結びつきにおいて、場所性を持つ用法は文語ではほとんど現れず口語でのみ現れる可能性や、調査の対象範囲について今後検討していきたい。

次に、移動動詞が kata (行く) や ota (来る) を含む複合動詞の例を見ていきたい。これには、takakata (近づいていく), takaota (近づいてくる), tallyekata (かけよる), chacaota (訪れる) などが現れた。この内、出現数の多かった takakata (近づいていく), takaota (近づいてくる) の内訳は、次の通りだった。

表3 【eykey 名詞句+移動動詞 (takakata, takaota)】の出現数と移動する主体の種類

takakata		takaota			
15		8			
移動する主体					
具体名詞		抽象名詞	具体名詞	抽象名詞	
11		4	4		4
有情名詞	無情名詞 ⁷		有情名詞	無情名詞	
10	1		4	0	

移動動詞が takakata (近づいていく) の例には、次のようなものがある。

(7) ku-nun myechpen kutul-eykey taka-ka hamkkey chwumul chwul swu isskeyssnunyako
 彼-は 彼ら-に 近づいて-行き

mwulepoasstaka motwu keceltanghayssta. <出典: 황만근은 이렇게 말했다>

彼は, 何度彼らに／のところに近づいて行き, 一緒に踊ることができるかと尋ねてすべて断られた. <出典: ファン・マンガンはこのように話した>

(8) kutulul kekcenghako salanghako issnun eluntul-i kutul-eykey takaka-nun nolyeki,
 大人たち-が 彼ら-に 近づ-く

kwucheycekulo kaceng aneyse tto hakkyowa sahwayeyse silchentwayeya hanun sicemita.

<出典: 한국민속의 세계 2 권>

彼らを心配して愛している大人たちが彼らに／のところに近づいていく努力が, 具体的に家庭
 中でまた, 学校と社会で実践されなければならない視点だ。 <出典: 韓国民俗の世界 2 冊>

このように移動動詞が takakata (近づいていく) の場合には、「～に」という対象を表しているとも、「～のところに」という場所性を示しているとも判断することができる。先に見たように, 移動動詞に kata (行く), ota (来る) のような典型的な移動動詞が用いられている場合には, 「～のところに」という場所性を示していたが, 移動動詞が takakata (近づいていく) のように複合的な要素を持つ場合には, 「～のところに」という「場所性」を表す意味合いが弱まり,

⁷ 1例のみ現れた無情名詞の例は, 次のような例だった。

kulena saylowun chwunchwucenkwuksitaylul macko issnun ittayey i chayki kwayen tokcatuleykey ettehan moyangsaywa ssuimsaylo takaka nunci twulyewun maumi aphsenta.

<出典: 인간을 위하여 미래를 위하여>

しかし新しい春秋戦国時代をむかえているこの時に, この木が果たして読者らにいかなる姿と使い道として近付くのか恐ろしいという気持ちが先じる。 <出典: 人間のために未来のために>

これは, 「木」が物理的に読者に近づくのではなく抽象概念的に用いられているため, 形式的には具体名詞であっても, 抽象名詞として用いられていると判断すべきであろう。

「～に」という「対象」を表す意味機能に近づいているということができる。

そして、移動動詞結合の全 64 例においては、**eykey** 名詞句が *-tul* (～達) を伴ったり *wuli* (私たち) であったりというような複数を意味する例が 16 例現れた。この **eykey** 名詞句が複数を意味する例は、*kata* (行く), *ota* (来る) のような典型的な移動動詞が用いられている場合には 1 例も現れなかったが、この *takakata* (近づいていく), *takaota* (近づいてくる) を合わせた 23 例中では 13 例現れた。**eykey** 名詞句が複数を意味する 16 例の内、大多数が *takakata* (近づいていく), *takaota* (近づいてくる) で現れていることになる。このことから、*kata* (行く), *ota* (来る) は結びつく **eykey** 名詞句が単数であっても場所性を持ちうるが、*takakata* (近づいていく), *takaota* (近づいてくる) は **eykey** 名詞句が複数の意味を持たないと場所性を持ちづらいという傾向を見て取ることができる。あるいは、*takakata* (近づいていく), *takaota* (近づいてくる) と結びつく場合には、**eykey** 名詞句が複数を意味することによって空間性を持たせ、場所性を示しやすくする必要もあるとも考えることができる。

この他に、2 例以上現れた複合動詞の出現数と移動する主体の内訳は次の通りだった。

複合動詞	出現数	具体名詞 (有情名詞, 無情名詞)	抽象名詞
<i>tallyekata</i> (かけよる)	4	4(4, 0)	0
<i>chacaota</i> (訪れる)	4	1(1, 0)	3
<i>tolakata</i> (戻ってくる)	3	0(0, 0)	3
<i>tolaota</i> (戻っていく)	3	0(0, 0)	3
<i>tulekata</i> (入っていく)	2	1(0, 1)	1

出現数が 1 例であったものには、*teyliko kata* (連れて行く), *ttwiekata* (走っていく), *nalakata* (飛んでいく) のような複合的な要素を持つ移動動詞が現れたが、その他に *paytaltoyta* (配達される), *sicip ponayta* (嫁がせる), *sicip ota* (嫁いでくる), *nathanata* (現れる) のような例もあった。この *nathanata* (現れる) をも移動動詞に含めるか否かは検討の余地がある。

以上のことから、**eykey** 名詞句が結びつく移動動詞に *kata* (行く), *ota* (来る) のような典型的な移動動詞が用いられている場合には、「～のところに」という場所性を示す。しかし、移動動詞が *takakata* (近づいていく) のように複合的な要素を持つ場合には、場所性を示した典型的な移動動詞とは異なって、「～のところに」という「場所性」を表す意味合いが弱まり、「～に」という「対象」を表す意味機能に近づくということができる。【具体名詞+**eykey** 名詞句+移動動詞】という結合において示される場所性は、移動動詞が典型的移動動詞である場合には示されるが、非典型的移動動詞である場合には場所性を示す度合いが弱まる。

3.1.2 移動する主体が抽象名詞の場合

【**eykey** 名詞句+移動動詞】という結合において、移動する主体が抽象名詞である【**eykey** 名

【**名詞句+抽象名詞+移動動詞**】という例は21例現れた。

(9) chinkwu hatongcengkwa taycocekiciman ohilye wuliuy kwansim-un kapok-eykey te ka issumul

興味-は コボク-に 行っ-ている

pwuihal swu epsta.

<出典: 고려대학교 교양 국어 작문(교육학과), 전자파일, 어휘 의미 분석 전자파일>

友達のハ・ドンジョンと対照的だが、かえって私たちの興味はコボクに/のところに更に行っ
ていることを否定することはできない。⁸

<出典:高麗大学校教養国語作文(教育学科),電子ファイル,意味分析電子ファイル>

(10) kacang kwucheycekin kesilako mitessten hwaksilhan cungkeka kapcaki cungpalhay pelinun

caynan-un kutul-eykey acik chaca-wase-nun an toynta. <出典: 결혼과 성>

災難-は 彼ら-に 訪れ-て-は

一番具体的なのだと信じた確かな証拠が急に蒸発してしまう災難は彼らに/のところにまだ訪
れてはいけない。<出典: 結婚と性>

(9)は【**eykey 名詞句+抽象名詞+移動動詞**】という結合であり、3.1.1では典型的な移動動詞であった kata (行く) を用いているが、「コボクに興味に向く」という意味で用いられているため「コボクに」に当たる部分が明確に場所性を示しているとは判断しがたい。(10)は **eykey** 名詞句が chacaota (訪れる) と結びつき、移動する主体が「災難」という抽象名詞であるが、この場合も「彼らに」に当たる部分が明確に場所性を示しているとは同じく判断しがたい。

この他に【**eykey 名詞句+抽象名詞+移動動詞**】という結合で、移動動詞が非典型的な移動動詞である例には、次のようなものがある。

(11) kkuthnay wenhaci anhten kyelmal-i ku-eykey takao-ko kunun kukesul icki wihayse

結末-が 彼-に 近づ-き

koylowehanta.

<出典: 고려대학교 교양 국어 작문(교육학과), 전자파일, 어휘 의미 분석 전자파일>

ついに望まなかった結末が彼に近づき、彼はそれを忘れるために苦しむ。<出典:高麗大学校教養国語作文(教育学科),電子ファイル>

(12) etten hyensil-i na-eykey takao-lci-nun molukeysciman ku hyensili ettehtun kaney naeykey pota

現実-が 私-に 近づいてくる-のか-は

⁸ 例文の日本語訳は全て本稿執筆によるもの。(8)の日本語訳にある「興味はコボクに/のところに更に行っている」は直訳であり、「興味はコボクに/のところに向いている」の方がより自然な訳ではあるが、本稿では移動動詞を比較するために直訳を伏している。

manhun nukkimkwa kkaytalumul cwul swu issумыen cohkeyssta.

<出典: 고려대학교 교양 국어 작문(교육학과), 전자파일, 어휘 의미 분석 전자파일>

どのような現実が私に近づいてくるのかは分からないが、その現実がどうであれ私により多くの感情と発見を与えてくれたらと思う。<出典:高麗大学校教養国語作文(教育学科),電子ファイル>

(10) (11) (12)からわかるように、移動する主体が抽象名詞である場合には、移動動詞が典型的なものであるか否かを問わず、場所性を示さない。さらに、次のような例も現れた。

(13) panuy aitulumul twullepotaka kunyeuy nwun-i wuyenhi namkai-eykey tolaka-ssta.

目-が ナムガイ-に 戻った

<出典: 황만근은 이렇게 말했다>

クラスの子供たちを見回して、彼女の目が偶然にナムガイに／のところに戻った。

<出典:ファン・マングンはこのように話した>

(13)の場合は tolakata (戻ってくる) の主体は具体名詞の nwun (目) であるが、ここでは物理的な「目」ではなく「視線を向ける」「目を向ける」という意味で用いられている。このように、具体名詞であっても抽象的な意味で用いられる場合には場所性を示さない。主体となる名詞に、具体物の側面と抽象的な側面がある場合には、どちらの側面で用いられているのかによって場所性の有無が異なる。

3.2 存在詞結合

移動動詞結合の場合と同じく、分析に用いる用例は、先にも述べたとおり文語資料の中から無作為に選んだ3000例および口語資料に現れた全423例をあわせた、計3423例を対象とする。現れた-eykeyの内、存在詞と結びついていると判断しうる例は、文語資料では44例であり、口語資料では9例の計53例だった。存在する主体の種類と、出現数の内訳は次の通り。

表4 【存在詞結合の出現数と存在する主体の種類】

出現数			
53			
文語		口語	
44		9	
存在する主体			
具体名詞	抽象名詞	具体名詞	抽象名詞
5	39	2	7

表 4 から、存在詞結合の場合には存在する主体に抽象名詞を取りやすい傾向が見受けられる。

3. 2. 1 存在する主体が具体名詞の場合

-eykey が存在詞と結びついており、存在する主体が具体名詞である例には次のようなものが現れた。

(14) swumkyecin pang(房). celmun nal kacang kothongsulewessten cemun na-eykey pang(房)-i
私に 部屋が

epsta-nun kesiessta. <出典: 월간 에세이>

ないという

隠された部屋。若い日、最も苦痛だった点は私に部屋がないということだった。

<出典:月刊エッセイ>

(15) atukhan yeysnal hwanin-eykey hwanwungilan seca-ka iss-essta.
ファニンに 庶子が いた

<出典: 고전문학 이야기 주머니>

遠い昔、ファニンに／のところにファヌンという庶子がいた。<出典:古典文学 話のポケット>

(16) apeci-eykey twu son-i iss-essul ttay-nun malya, emmato naeykey tonesina capchay kathun
父に 両手が あった時は

kel mantulecwukonun haysse. <出典: 푸른 수염의 첫번째 아내>

父に両手があった時は、母も僕にドーナツやチャプチェみたいなものを作ってくれたりしたもんだ。<出典:青いひげの一番目の妻>

今回収集した文語資料において、【eykey 名詞句+存在詞】という結合で存在する主体が具体名詞である例は全 7 例だった。今回調査を進めるにあたって、冒頭で示した(3) ku selyunun eceykkaci na-eykey iss-essnunteyyo. (その書類は昨日まで私のところにあったんですがね) のような【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という結合においては、「具体的なものが誰かのところにある」のような所在という場所性が明確に示されるものであると予想した。しかし、(14) の場合においては、【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という結合であるにもかかわらず具体名詞の所在を意味する場所性を示さずに、「部屋」の所有の有無を表していた。他の例においても(3)のような具体物の所持という場所性を示す例が現れず、予想に反した結果となった。

それでは、(3)のような【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という結合における「具体物が誰かのところにある」という場所性を示す所在の用法は、存在はするものの使用されにくいの

であろうか。この結果を受け、作例による例文を用いたインフォーマント調査⁹を試験的に行った。次の3つの例文は「本」という具体物が誰かのところにあるという所在を表すものである。

(17) ku chaykun nwukwu-eykey isseyo? (その本は誰のところにありますか)

誰-に

(18) ku chaykilamyen na-eykey isseyo. (その本なら私のところにあります)

私-に

(19) ku chaykun senpay-eykey issul keyeyyo. (その本は先輩のところにあるはずです)

先輩-に

その結果、この3つの例は全て自然な文であるという回答を得た。このことから、【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という結合においては、実際の用例に現れた場所性を示さず¹⁰に所有の有無を表す用法と、実際の用例には現れなかったが「具体物が誰かのところにある」という場所性を示す所在の用法があることが確認された。

先行研究において、【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という結合の表す意味機能は、「所有」「所持」「所在」等、様々な名称で表されてきた。本稿では、(3) (17)~(19)のように存在する主体のありかのみを表す場合を、場所性を示す「所在」とし、(14)のように存在する主体をeykey 名詞句が有していることを表す場合を、場所性を示さない「所有」として区別することとする。

それでは、この【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という同一の条件下における所在という場所性が明確に示されるものと、場所性を示さず所有の有無のみを表す場合の境界線はいかなるものであろうか。その境界を探るために、上記と同様に作例によるインフォーマント調査を行った。

行った調査は、次の「所在」を表す文に①~⑨の単語を入れた場合に、自然な文として成り立つか否かというものである。

ku () (i)lamyen cikum ce-eykey isseyo.

私-に

その () なら、今私のところにあります

①selyu (書類)

⁹ 協力してくれた母語者3名の内訳は次の通りである。男性1 (40代。ソウル出身)、女性1 (30代。ソウル出身)、女性2 (30代。ソウル出身)。

複数のインフォーマントから、(17)~(19)のような文や、作例で提示した移動動詞結合の文である ku aynun sensayngnimkkey kasseyo. (その子は先生のところに行きました)、yaytula, emmaeykey ka isse. (子供たち、お母さんのところに行っていないさい)等は-eykeyの口語表現とされる-hantheyに置き換えた方がより自然であるとの指摘を受けたが、その点については稿を改めて考察したい。

- ②os (服)
- ③chayksang (机)
- ④ipwul (布団)
- ⑤catongcha (自動車)
- ⑥pang (部屋)
- ⑦cip (家)
- ⑧kenmwul (建物)
- ⑨hoysa (会社)

その結果、①～④は提示文に入れても違和感がなく、⑤を境として違和感が生じるという見解の一致を見た。そして、すべてのインフォーマントから、⑥～⑨は「ku () (i)lamyen cikum ceyka kaciko isseyo.」(その () なら、今私が持っています) という「所有」を表す文に言い換えることによって不自然さが消失するとの意見が得られた。このことから、①～④は場所性を示す「所在」の用法であり、⑤は境界的、⑥～⑨は場所性を示さない「所有」の用法であることが分かる。¹⁰

①～⑨までの性質を区別する基準として、eykey 名詞句と比較した場合の「大きさ」、「可触性」、「可動性」を想定すると、①～④と⑥～⑨の間で大きく分けることができる。それらをまとめると、次のようになる。

表5 存在詞結合における存在する主体の性質

具体名詞	大きさ	可触性	可動性
①selyu (書類)	－	＋	＋
②os (服)	－	＋	＋
③chayksang (机)	－	＋	＋
④ipwul (布団)	－	＋	＋
⑤catongcha (自動車)	＋	＋	＋
⑥pang (部屋)	＋	－	－
⑦cip (家)	＋	±	－
⑧kenmwul (建物)	＋	±	－
⑨hoysa (会社)	＋	－	－

¹⁰ ①～④は、インフォーマント調査を行った文では「所在」を表しているが、用いられる文によっては「所有」を表すことも可能である。その一方で、⑥～⑨は「所有」のみを表し、「所在」を表しえない。

この表から、【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という結合における「所在」と「所有」を分ける境界のひとつは、具体名詞の大きさであることがうかがえる。①selyu (書類), ②os (服), ③chayksang (机), ④ipwul (布団) は eykey 名詞句よりも物理的に小さいか、あるいは一回り大きいぐらいのものである。一方、⑥pang (部屋), ⑦cip (家), ⑧kenmwul (建物), ⑨hoysa (会社) は eykey 名詞句よりも物理的に大きく、更には具体物ではなく抽象的な「価値」をも表すことのできる。⑤の catongcha (自動車) は、これらの境界線上にあるものと思われる。つまり、【eykey 名詞句+具体名詞+存在詞】という結合においては、具体名詞が eykey 名詞句よりも物理的に小さいか、一回り大きいぐらいのものの場合に「所在」を表し、eykey 名詞句よりも物理的にはるかに大きい場合には「所有」を表すのである。このことは、先行研究である中西(2010:33)で述べられた「eykey は先行名詞の有情性を維持しつつその周囲に空間を設定する機能を有する」という見解と一致する。存在詞結合において、eykey 名詞句が「所在」という場所性を示す場合には、存在する物が eykey 名詞句の周囲に設定された空間の中に納まる必要がある。そして、存在する物が eykey 名詞句の周囲に設定された空間の中に納まらない場合には場所性を示すことができず「所有」のみを表すことになる。

可触性という観点から見ると②⑦⑧は「±」だが、可動性という観点から見ると①～⑤が「+」、⑥～⑨は「-」となっている。先の大きさという観点とあわせて考えると、場所性を示すのは、存在する主体の大きさが eykey 名詞句よりも「-」で、且つ可動性が「+」である場合である。一方、場所性を示すのは存在する主体の大きさが eykey 名詞句よりも「+」で、且つ可動性が「-」である場合であることがわかる。

3.2.2 存在する主体が抽象名詞の場合

収集した用例に現れた存在詞と結びついている例には、次のようなものが現れた。

(20) nan nehuytul-eykey cenhye kwansim-i epse. <出典: 황만근은 이렇게 말했다>

お前たちに 興味-が ない z

俺はお前たちに全く興味がない。<出典: ファン・マンガンはこのように話した>

(21) yakina cwusato cwuci anhnun cinlyoey tonul naymyen mwenka sonhaylul pontako sayngkakhakena ku uysa-eykey mwuncey-ka iss-tako sayngkakhayssta. <出典: 사회를 보는 논리>

医者-に 問題-が ある-と

薬や注射も与えない診療に金を出せば何か損害をこうむると考えたり、その医者に問題があると考えた。<出典: 社会を見る論理>

このように-eykey が存在詞と結びつき、その存在する主体が抽象名詞である場合には、場所

性を示さない。なお、今回抽出した用例には現れなかったが、ton（お金）のように具体名詞ではあるが、価値を示す抽象概念として用いられているものは場所性を示さない。これは 3.1.2 で述べたことと同様に、主体となる名詞に具体物の側面と抽象的な側面がある場合には、どちらの側面で用いられているのかによって場所性の有無が異なるのである。

4 結論と今後の課題

本稿では、-eykey が「～のところに」という「場所性」を示す用法の意味機能を-eykey と結びつく用言や、存在詞と結合する場合の主体となる名詞の属性に注目し、いかなる条件下では-eykey が「場所性」を示し、いかなる条件下では「場所性」を示さない、あるいは示すことができないのかという点について考察を行った。その結果をまとめると次のようになる。

【移動動詞結合】

名詞句	移動の主体	用言	場所性の有無
eykey 名詞句	有情名詞 (具体名詞)	典型的移動動詞	○
eykey 名詞句	有情名詞 (具体名詞)	非典型的移動動詞	△ (場所性が弱まり 「対象」に近づく)
eykey 名詞句	抽象名詞	移動動詞 (典型的であるかは問わない)	×

【存在詞結合】

名詞句	存在する主体		用言	場所性の有無
eykey 名詞句	具体名詞	大きさ －	可動性 ＋	○ (所在・所有)
		大きさ ＋	可動性 －	×
eykey 名詞句	抽象名詞		存在詞	×

以上のことから、移動動詞結合においては、「場所性」を示す意味機能と「対象」を示す意味機能は個々が別途に存在するのではなく、連続的に連なっており、結びつく用言及び名詞句の性質によって変化しているのだといえる。

-eykey は対象を表す際に単に先行名詞の有情性によって選択されるだけでなく、先行名詞に場所性を付与する意味機能を有する。これは、移動動詞及び存在詞と結びつく際に限られ、移動動詞の典型性や主体となる名詞句の具体性及び抽象性との関わり合いの中でその意味機能が

決定される。

本稿では、-eykey が「～のところに」という意味を有することを「場所性」とし、その有無を「場所性を示す／示さない」と表したが、中西(2010)にある「空間」という用語の使用と合わせて検討すると共に、-eykey の口語表現とされる-hanthey が場所性を示す場合の諸条件や、-eykey と-hanthey の相互関係がはたして口語か否かのみによるものであるのか等を、現代朝鮮語における与格の意味機能という観点から広く考察を進めていきたい。

参考文献

<日本語で書かれたもの>

- 伊藤英人(2013)「朝鮮語」特集「所有・存在表現」『語学研究所論集』第18号, 290-307
生越直樹(2002)「日本語の助詞「に」と朝鮮語の助詞「eykey」をめぐって」『日本語学と言語学』 東京:明治書院
亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)『言語学大辞典』第6巻 術語編 東京:三省堂
菅野裕臣他(1988;1991)『コスモス朝和辞典』東京:白水社
言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』東京:むぎ書房
中西恭子(2010)「現代朝鮮語の「与格」助詞에게について—日本語「に」との対照を中心に—」『人文論叢』58 京都女子大学
ハン・ナムス(1966)「現代朝鮮語における格助詞-에게(-ege)について」『言語の研究』所収 東京:むぎ書房
油谷幸利他(1993)『朝鮮語辞典』東京:小学館
油谷幸利(2005)『日韓対照言語学入門』東京:白帝社

<韓国語で書かれたもの>

- 高永根(2002)『改訂版 標準中世国語文法論』ソウル:集文堂
国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル:斗山東亜
朴良圭(1972)「国語処格についての研究—統合上の特徴を中心に—」『国語研究』27 ソウル:国語学研究会
朴良圭(1975)「所有と所在」『国語学』3 ソウル:国語学会
延世大学言語情報開発研究院(1998)『延世韓国語辞典』ソウル:斗山東亜
劉昌惇(1964;2000)「李朝語辭典」ソウル:延世大学校出版部

<コーパス>

- CD-ROM 「21世紀世宗計画均衡コーパス」ソウル:国立国語研究院
ツッココマ世宗コーパス活用システム <http://kkma.snu.ac.kr/> (検索日 2014年8月1日)

Location Indicated by the Dative Form “-eykey” in the Modern Korean Language: A Focus on Conjunctions with Motion Verbs and Copulas

Remina Yamazaki
rem79rem@yahoo.co.jp

Keywords: dative, location, motion verb, copula, possessive, presence, concrete noun, abstract noun

Abstract

In the Modern Korean language, the dative form “-eykey” can only be combined with sentient nouns, and is often translated into Japanese using the case particle “*ni*.” However, in some cases, when “-eykey” is combined with a motion verb or a copula, it expresses a sense of location with the concept of “in (a place).” This paper attempts to identify the conditions under which this use of “*eykey*” indicates or does not indicate location, with a focus on its uses in combination with motion verbs and copulas, and based on linguistic facts. The first finding is that when used in combination with a motion verb, “-eykey” clearly indicates location when the subject of the motion is a concrete noun that is sentient, such as a human being, and when the motion verb used in the statement is a prototypical motion verb such as “*kata*” (to go) or “*ota*” (to come), whereas the motion verb is an abstract noun, or when the motion verb is atypical and complex, such as “*takataka*” (to draw near), the implication of location is weak, and the form comes close to grammatically representing a “target.” The second finding is that in the “*eykey*” noun phrase + noun + copula pattern, “-eykey” does not indicate location when the subject of the copula is an abstract noun, whereas when the subject of the copula is a concrete noun, the form can indicate location under a few necessary conditions. An “*eykey*” noun phrase only indicates location and expresses presence when the referent of the concrete noun is about equal in size to that of the “*eykey*” noun phrase and is capable of motion, and when the noun included in the “*eykey*” noun phrase is incapable of motion, the form expresses presence but does not indicate location. Thus, it turns out that “*eykey*” noun phrases can indicate location in the “*eykey*” noun phrase + noun + copula pattern only when the subject refers to an entity that is capable of motion and is only up to the same size as what the “*eykey*” noun phrase refers to.

(やまざき・れみな)